

## ■貸はらっぱ音地（牧住 敏幸・敦子）

### まちづくり活動の内容と成果

#### 貸はらっぱ音地

**概要:** 谷中の小さな住宅用の土地を「貸はらっぱ」として貸して、まちにもっとも近い新しい表現空間として様々な表現者に自由な発想で使ってもらっている。

**住所:** 台東区谷中7-17-6 面積: 約 50㎡

**期間:** 1996年9月～

**目的・動機:** 家を建てるために土地を購入！ただお金も時間もなく、家自体は建てられず放置。ただそれでは土地がもったいない、建てずに何かできないか。建てずになにかまちとかかわることはできないか。ならば、同じように表現したいがお金がない駆け出しのアーティストなどに貸せないか。

こうした思いから、このありふれたまちの空き地に「貸はらっぱ音地」という屋号をつけて表札（右図）を置き、「はらっぱ貸します」と手を上げたのが5年半前であった。

**活動状況:** 当初2年間は自主イベントも含めて年間15イベント程度であったが、5年目はなんと1年に94イベント近く、稼働も延100日にまで達した。内容も思いがけず様々な利用がなされた。舞踏や平面・立体、陶芸や銀金のアーティストから、写真家、手づくり市、アートフリマ、移動パン屋さん、子供が木と遊ぶワークショップや風鈴絵付け、ゲルを設営して一泊するワークショップやピクニックなど。また芸工展や一箱古本市など。まちのイベントに参加し地域とのつながりが広がった。そして最近では個人が企画する東北支援イベントなどにも利用されている。

**利用実績:** 5年8ヶ月 253イベント延 350日稼働（参考資料\_4参照）

※利用料は2000円/日（3日目以降は300円/日）

#### 活動内容:

### 1\_アーティストライブ利用 ⇒ まちで偶然に出会う芸術 まちに一番近いギャラリー



普段はわざわざギャラリーの扉を開けて入ることのない人も、子供や車椅子のおじいさんも、通りすがりに芸術を目の当たりにする。こんな出会いが彼らの心に広がります。あんな通りすがりの女性か「息子が彼氏になりましたかったのよね・・・でも私が後でいけなかったからと後悔してしまっ・・・」と涙をみせる場面も。

### 2\_屋外ギャラリーとしての利用 ⇒ 制度を超えた表現空間



塩谷良太郎（地景作品）



写真家牧敏幸（写真展示）



羽鳥智裕（花舞踊）

既存のギャラリー制度の中では実現できない表現の可能性も引き出した。

土の床と月の照明は新しい舞踏の緊張感を高めた。

#### はらっぱ貸します

新しい表現空間として  
芸術と街の出会いの場として  
週末ワークショップ・都市マーケット空間として

#### 貸はらっぱ 音地 ONDI

office UZUMAKI

e-mail:

ondi.uzumaki@gmail.com

HP:

http://ondi.exblog.jp/





#### 4\_ 写真市場、手づくり市利用 ⇒ 喜ぶ買い手につくり手が会える、対話のある街売りの場の復活



近年は道路使用が厳しく規制されているため街売りができない状況になっている。道行く人との対話や偶然の出会いが手づくり手にとって大きな刺激になるという。基地はそんな出会いを生んでくれ手づくり手もそんな刺激を求めて基地にやってくる

#### 5\_ 地域ぐるみのイベントへの参加協力（一箱古本市・谷中芸工展）⇒ 地域につながる「はらっぱ音地」



地域の活動が盛んであるなかに飛び込んで、地域にとって必要な空き地（はらっぱ）となり、はらっぱに笑顔が広がっていく。空き地に「音はらっぱ音地」という屋号をつけたことが、街からも店舗のように認識され街に溶け込んでいけたと考えている。

#### 6\_ ワークショップ利用 ⇒ 道行く人が加わる 新しく自由な発想のワークショップ



音地でのワークショップでは道行く人がよく加わる。人のかかるゲルの設置もいつの間にか人が集まる。きっとその出会いが心に残り街の印象となって残ってくれるのだと考える。

#### 7\_ 青空ショップ利用 ⇒ 販売の場の提供



移動パン屋さん

お店を持っていない若い人たちの力になりたい。  
人気の出たパン屋さんは現在見事独立して空を構えている。

#### 8\_ 東北復興応援 ⇒ 個人からの発信の場の提供



スモール東北フェスタ 田んぼの記憶プロジェクト

東北を応援したい。その気持ちだけで開催されたプロジェクト。  
音地では費用も規模も個人のレベルでイベントが開催できる。

#### 成果と展開：

i) 近隣との関係や家づくりへの不安はあったが、勇気を持って空き地を解放したことで、多様な活動を行うことができた。夫婦2人でも行うことができたことは、今後同じようなことをやろうと思っている人に勇気を与えるひとつの成果かと思う。東京の空き地を合わせると公園面積が1.5倍となるとして、メルボルン工科大のTOKYO VOID 研究では空き地をネットで連携する試案を提案している。個人ではそうした展開は難しいが、この応募を機に各地でそれぞれの特徴を持った空き地活用とつながればと考える。

ii) 表現したいという人々の力の大きさを、この活動で改めて認識させられた。その力を引き出す環境を街の中に作り上げていくことが、官民共に一番のまちの活力になるのだと実感した。音地は設備をあえて何も設けず格安で自由であるということで、ツイッターやフェイスブックのような個人サイズのメディアの空間版であったのではないかと考えられる。音地が利用されている背景には、そうした空間を表現者が求めていたのではないかと考えられる。

iii) さらにこの活動を、単なる空き地活用ということではなく、街とのつながりをもった家づくりという観点でも新しい提案にもつながるのではないかと考えている。すなわち、土地と住宅をセットとした金融政策に左右されずに、家づくりをもう少しゆっくりに楽しむためのひとつの方法ではと考える。土地でまず街とのつながりをもって、そこでできた場を生かした家づくりを考えていく。こんなことを考えながら、次の展開へと進んでいきたい。